
暗黒街の沈黙

take.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗黒街の沈黙

【Nコード】

N5653B

【作者名】

take .

【あらすじ】

マフィアのボスを父親に持つジョンソン・スミスは恐るべき父親の召喚によってその足を暗黒街へと踏み入れることとなった。彼を取り巻く暗黒街の人々。多くの過去を持つ彼らはある運命のいたずらによってその人生を沈黙へと導くのだった。

第一話 仲間

俺の名はジョンソン・P・スミス。この街を牛耳るスミス家の御曹司だ。そう言うところ聞こえはいいが、俺は別に特別な存在じゃあない。親父があまりこの俺を家族扱いしないからだ。二十歳になる昨日まで家の仕事も手伝わそうともしてくれなかった。俺を他人扱いし顔を見るのもめったにない。ときたま街で見かけても声を掛けられることもない。ただ、生活する金だけを払っていただけだった。しかも俺をバカにしてピーチ・ボーイだなんて呼びやがる。全く失敬な野郎だ。

でも昨日、この俺が初めて親父に呼び出されんだ。仕事をやるからこの金で仲間を集めてこいとね。俺は受け取った金で早速仲間を集めた。知り合いのついで集めた奴ばかりで幼馴染はいない。皆初対面だ。

三人の仲間を集めた俺は今日皆を呼び集めた。今日そろって親父にご面会というわけだ。それなのに――。

まったく、この寒いのに外で待たされるなんてこんなことが許されたもんか。俺の集めた仲間って言うのはどうもものぐさな奴ばかりだ。昨日は二つ返事でうけたくせに今日は禄に集まりもしない。

「そついえば昨日クレイブが風邪っばいって言ってましたよね。熱でも出したんじゃないですか」

そう言つて並木に寄りかかっている男は我がグループの頭脳となるはずの男、ダんだ。もと財務省だったが横領の嫌疑を掛けられてクビ。いつか自分をはめた連中に仕返しをするために暗黒街をうろつきまわっていたのだ。

「あの大男が風邪？ そんなことあつてたまるか。馬鹿は風邪引かないと言う諺がある」

「知ってます。でも彼はああ見えてとても病弱なんですよ。聞いた話によると十五のときに結核に……」

知り合いにも忠告されたが彼は長話が好きだ。一度話し出すと止まらない。

「……それで彼のかみさんも結核になりかけましてね。ここからおもしろいんです」

「分ったよ、ダン。もう黙れ」

「……はい」

「それで、リユーは何処いったんだ。あいつは病弱じゃないだろう」「さあ、何処でしょうか。私は前にも中国人に会ったことがあります但未だに中国人というものが理解できませんね。そういえばこないだも……」

また始まった。彼の優れた頭脳と情報処理能力を買ったのだが、今となつては自分の選択が間違いであったようではない。

リユーというのは街で麻薬を売買するチャイニーズ・マフィアのひとりだった。顔が広く人の信頼も厚かったので高位まで上り詰めたようだが、売り物の薬に手をつけて仲間に殺されかけた。いつか自分を撃った男を血祭りに上げようと躍起になって暗黒街で仲間を探していた。

ダンは相変わらずしゃべり続けている。

「あははは。その中国人の彼がひっくり返っちゃったんですよ、そこで。いやーあれは面白かった。しぬかと思いましたもん。あはは。あ、リユーが来ましたよ」

ダンが指差した方に目をやるとそこにはリユーがいたが、俺は自分の目を疑わざるをえなかった。

彼はチャイナドレスを着ていたのだ。

訳がわからないぞ。いくら中国人だからってこんなステレオタイプな登場なし方があるか。しかも彼はもちろん男だ。リユーはこの人通りの多い道を悠然と歩いていた。

そこへダンが気さくに挨拶する。

「やあ、リユー。元気かい？」

「もちろんね。少し遅れてしまったよ、すまないね」

「いやあ、いいんだよ。素敵な格好だね。民族衣装かい？」

「ああ、中国人は皆これを着るよ」

ダンのおしゃべり好きとリユーの常識のズレは波長がよく合うよううだ。しかしダンだってあれが女性の着る物だって事ぐらいわかってるはずだ。話をあわせているんだろうか。いやこの際そんなことは問題じゃない。

「リユー、その格好はどうしたんだ。まるでオカマだぞ。この間会った時はちゃんとスーツを着てただろ？」

「あれは仮の姿ね。中国人は皆これを着るよ」

「何言つてんだ。それはドレスだろう。女の着物だろう。俺の仲間にはオカマはいらないぜ。ふざけるなよ、とっとと着替えて来い！」

「だからこれは男の正装なのね」

「嘘つけっ！」

「インディアン嘘つかないのよ！」

いつからてめえはインディアンなんだ、と突っ込む元気も俺にはなかった。元大物マフィアの中国人ということで雇ったのに、何なんだいったい。

こうなると人柄が期待できそうなのはもう一人の男、クレイブだけになる。早く着てくれるといいんだが。

「ところでクレイブに会いませんでした？ まだ来てないんですが」

「会うも何もそこにいるじゃないのさ」

ふりむくとそこには確かにクレイブがいた。神妙な面持ちで煙草をくゆらせて突っ立っていた。

彼は元FBIだ。マフィアに潜入捜査をしていたがやっているうちにマフィアに興味が出て本当にマフィアになってしまったという男だ。その後元FBIだということがばれて信用できないということでお払い箱になった。

このメンバーの中で彼だけはスミス家の顧問の紹介だった。用心棒だけはちゃんとした奴をつけさせようとしたらしい。

「クレイブいたのか。来たら声掛けろよ、びっくりしたじゃねえか」

「いえ、あまりにダンが忙しくしゃべっていたので」

「まあいい。えーと、これで全員揃ったわけだな。じゃ、行くぞ」

俺達四人は車道に停めておいたキャデラックに乗り込んだ。運転はクレイブだ。スミス家の顧問によれば彼は無口で愛想が悪いが仕事はきっちりこなすということだ。だから安心して運転を任せられる人間ではある。リユーなんかに運転させた日にゃあ、どうなるか分ったもんじゃない。俺は少し用心してリユーと一緒に後部座席に乗り込んだ。

今は真夜中だ。歓楽街をでて暗くまっすぐな道を走ってオフィスに向かう。

クレイブが運転しながら話しかけてきた。

「スミスさん」

「ジョンソンでいいよ」

「ええ、ジョンソン。昨日会ったときには言っていなかったのですが、なぜスミス・ファミリーはあなたにこのメンバーを集めると……？」

「わからねえな。何しろ親父とはあまり話をしないんだ。この間だつて初仕事をさせるからメンバーを集めろと言われたがいったいそれがどんな仕事なのか聞く暇もなかった。どんな仕事なのかはあつてみないとわからない」

「簡単な仕事かいね？」

リユーが口を挟んできた。

「ああ。未経験の俺に任すんだ。難しい仕事じゃあるまいさ」

「この仕事が終わったら私の仕事手伝ってもらえるんだよね？」

「あのあだ討ちの件？」

「そうよ。私を追い落とした連中に仕返しをするのさ」

「どうだろうな。皆が納得すればだが」

するとダンも早口でまくし立て始めた。

「スミスさん、私の分もお忘れなく。私とて連中に仕返ししてやらねば気が済まんのです。あの連中つたら卑劣極まりない屑どもの集まりです。前に私が食事に言った特もそうでした。連中はフオーク

を落としたのを私のせいにしてですね」

「わかったよ、ダン。その件とて皆が納得すればの話だ。わかるな？ 要は皆が納得するか否かなんだよ」

ダン是不機嫌そうだったが素直に口を閉じた。

車が郊外の住宅地に入った。真夜中ながら車通りがある。

考えてみるとこのメンバーの中でただ金で雇われたのはクレイブだけだ。顧問の紹介とはいえ、他のメンバーが金だけでなく他の件でも面倒を見てくれるといわれれば奴も何か求めるのではないだろうか。尋ねてみたがクレイブの返事はそっけないものだった。

「ありませんよ。私の場合この前にいろいろとスミス家にお世話になったので」

「そうなのか？ 何だよ。言ってみろ」

「……」

「言えないような事か？」

「いえ、そういうわけではないんですがね」

一瞬、リユーがにやりとした。何か知ってるんだろうか。

俺が問いたただそうとすると突然車にブレーキがかかり急停車した。後続車が一台、ぎりぎりのところで追い越して行った。

「どうした？ 尾行されてたか？」

ダンは笑った。

「まさか。昨日結成されたメンバーですよ。他のファミリーの耳もそこまで早くないでしょう」

ダンが車を降りた。俺も後続く。

「じゃ何だ。どうしたんだ」

「ついてこないでくださいよ」

ダンは道路脇の草むらまで歩いていった。

「おい、ダン。説明しろ。何があった」

「小便ですよ。我慢してたもので」

俺はダンの尻を蹴り飛ばしてやった。ついでに急停車させたクレイブにもだ。あいつ無口な癖して根は不真面目と見える。やれやれ

だ。バカ三人組に囲まれてこれからが大変に、なりそうだ。

第二話 親父殿

俺は三人の部下を引き連れ、親父のオフィスへと向かった。

いやしかし、さすがはスミス・ファミリーのオフィスだ。馬鹿でかい敷地にぼつかりと小ぶりの屋敷が見える。庭は林で覆われていて建物自体はよく見えない。今はもう日が沈んでいるのでなおさらだ。

しかし俺を驚かせたのはそれより、辺りの警備の数の多さだった。息子の俺が来るということもあるのだろうか、ずいぶん物々しい警備だ。

「うひゃ、こりゃすごい」

そういつて最初に車から飛び出したのはリユーだ。俺も後に続く。「元チャイニーズマフィアのリユーが見てもすごいのか。なかなかだな」

クレイブとダンも車を降りた。

「クレイブ、お前はどうか。やっぱりすごいのか」

しかしクレイブは何もいうことなくただ肩をすくめて見せたただけだった。

そうかと思うと、ダンがすごい。車が着いて迎えに来た警備のガシマンを上から下までずつと眺めているのだ。そんなことに動じる彼らではないが明らかに迷惑そうだ。このメンバーで裏社会にかかわっていなかったのは俺とダンだけだ。おそらくダンはグループの頭脳となるよう一から勉強しているのだろう。

警備の者に連れられて敷地の奥に入るとやがて大きなテントに囲われた建物が目に入った。

俺が不思議そうにしていると警備の者が声をかけてきた。

「ははは、若旦那あれを見るのは初めてですかい。テントがかかっててよくは見えませんがあれは――」

「立体駐車場だな」

ダンが割り込んで言った。

「こちらは？」

「ああ、俺の専属顧問だよ。ダン・ノートンだ」
すると警備はダンに向き直って言った。

「よろしくダン。私はデイビー・クラーク。今日の若旦那のお迎えの総責任者だ。普段は三丁目のカジノを経営してる」

クラークはにこやかに笑いながら言っていたがダンの視線はそれを見事に無視していた。

「まさか個人宅に立体駐車場とはね。ニューヨークでも数多くないだろう」

「そのとおりさ。ニューヨークでは初めてだ」

ダンはいばらくテントに覆われた立体駐車場を眺めていた。ダンの少し無礼だったかもしれない発言があってもクラークはにこやかに笑っていた。なかなかいい男だ。信用も厚いのだろう。

しかし立体駐車場なんて珍しい物を作ったもんだ。そんなに多くの車を保持しているんだろうか。仕事に車は不可欠だろうが、そんなに多いものなのね……。

と目を横にやると、来る途中で服を着替えさせたリユーがさつきまでとはまったく違う表情である警備の男を見ていた。ダンと似た、いやまた少し違った鋭い目つきでその男を見ている。その男はリユーの視線に気がついてないようで、ぼうっとしているだけだった。なにやら訳があるのだろう。リユーの事となると、おそらくはチャイニーズマフィア時代の何かだろうか。声をかけようとも思ったが今は黙っておいた。

「中では幹部が全員勢ぞろいで若旦那をお待ちです。もちろん、ドンもね。さあさあ、中へ入られませんか」

クラークの言葉に俺たち四人は屋敷の中へと進んだ。屋敷の両開きのドアの両脇には同じように警備のものが突っ立っていた。かなりの厳戒態勢のようだ。

生まれて初めてこんな待遇を受けた俺は内心の喜びを隠しきれず、

思わず笑いがこぼれそうになるのを必死にこらえていた。何せ生まれてから今日までずっと母と二人暮らし。親父のおかげで学校には通えていたがそれ以外で贅沢をする事は滅多になかった。それが、これだ。十数人にも年上のガンマンにこうして頭を下げられている。

両開きのドアを通るとそこは広いリビングだった。ここにもガンマンが数人、そして幹部の秘書かと思われる人間が幾人かいた。みな黒服にコートを羽織っている。中には帽子までかぶっている奴もいる。

そのひとりが進み出てきてクラークに耳打ちした。それにクラークは表情を変えず、ただうなずいただけだった。

「さあ奥のドアを開けて中に入ってください。みな待ちくたびれているそうです」

俺たち四人はリビングにいる男たちを交わす様にして奥にいった。「とうとうこのドアを開けるときが来たな。このドアを開ければ俺は晴れてスミス・ファミリーの仲間入りさ」

俺は振り返って三人にささやいた。彼らはただにやっと微笑んだだけだったが俺にはそれで十分だった。俺はドアの脇にいた男にドアを開けるようめくばせして合図した。男は軽く頷いてドアノブに手を掛け、ゆっくりとそのドアを開けた。

その部屋、いや、そのスミス家のオフィスルームには、親父ならびに多くの幹部たちが俺を待っていた、ようだった。というのは、彼らの雰囲気がまったく明るいものでなくとも俺を待っているようには見えなかったからだ。

「ジョンソン、よく来たな」

オフィスの一番奥にいる親父がひとつ軽いため息をついてそう言

った。親父は数人の幹部に囲まれて椅子に座っている。

「あまりの暗い待遇に驚いているか？」

俺は幹部の連中の面をゆっくり眺めてみた。彼らの雰囲気을正しく形容するのは難しいが、なんというか、そこには何の感情も感じられなかった。

「実はお前に来るようにいつてからいろいろ状況の変化があった」

親父は静かに立ち上がった。

「我々にお前を歓迎するだけの余裕がなくなったんだ。悪く思わないでくれ、本当のことだ」

俺はもう一度部屋にいる人々を眺めてみた。しかし連中の暗い眼は何も俺に教えてくれなかった。俺は心の中である独特の感情が噴出しているのに気づいた。

「矛盾するようだが、我々はお前が以前よりもっと必要になった。そういう意味では、歓待したいところだ。だが――」

俺はたまらず言った。

「わかってるさ。俺だって子供じゃない。場の雰囲気ぐらい読めるさ。どんな状況におかれているのかは知らないけど、俺は仕事だけ頂いてすぐさま帰ればいいんだろ？」

俺はそう言ったけれどもこのときに一瞬で場の雰囲気が変化していたのに十分気づいていた。幹部どもの視線が一気に親父のほうへ向けられた。親父は黙ってじつと俺の顔を見ていたが、やがて自分の秘書らしき男に目配せした。するとその男は手元から紙袋を取り出して俺に渡した。

「それには仕事の詳しい内容が書いてあるはずだ。明日から期日までにしっかり任務をこなしてもらうぞ。それと――」

親父がそういうと親父のすぐ横にいたスーツの男が進み出た。

「こいつだ。お前のそのグループに加えさせてもらう」

その男はまだ若かった。すらっとした鼻筋に鋭い目つき、一見するとなかなか整った顔立ちのようだが、そんなことは問題じゃない。

「どういう意味だ？ 俺はファミリーの紹介ですでにクレイブをつけてるんだぜぞ。それでもまだ不満なのか？」

俺は親父に聞いたつもりだったが答えたのはその秘書だった。

「そうです。今のままでは少し心配なので人員の補強を」

親父が秘書を一瞥し、言った。

「補強じゃない」

この時、妙に背中がゾクツとするのを感じた。親父の視線に俺が屋敷に入ってからはじめの恐怖を感じた。

「是正だ」

どこか空を切るような、親父の冷たい視線が俺に降り注いだ。

第三話 命令の意図（前書き）

父親から初仕事をもらったジョンソン。新入りが加わった5人のメンバーで初仕事にかかる。

第三話 命令の意図

翌日。

俺たちはニューヨークのヘルズキッチンにあるスミス・ファミリーの隠れ家に集まった。隠れ家といってもただのアパートの一室だが俺たちはこれからそこを拠点として活動を行うのだ。今回は前回と違い皆定刻に集まった。

親父に、強制的に俺たちの仲間に入れられたその男は名をルイス・アンベールといった。背が高くインテリじみた顔をしている。マフイアらしからぬブラウンのジャケットを着こなしていた。

俺たちは部屋の中央に無造作に置かれた円卓を囲んで座った。粗末な部屋だ。ソファーや絨毯などはない。

「それで、ドンから渡されたのは何だったい？」

そう訊いてきたのはリユーだ。俺は昨日寝る前に親父から受け取った書類を読んでみたのだった。しかし――。

「スミス・ファミリーの指令書は読むのが難しい」

ルイス・アンベールが静かに言った。

そうだったのだ。はつきり言って、まるで意味がわからなかった。俺はビジネスバッグから書類を取り出して、机に並べた。それは二枚あってひとつには地図、もうひとつには長々と文章が並べられていた。

「な、なんですかね。これは」

ダンが文章の書かれた方を手にとって見た。

「聖書の引用ですか。これは」

ダンはそれを声に出して読み始めた。

「神の子は仰せになった。『あなたたちが求めるものを主に欲してはならない。主は既にそれを知っておられるからである。主に対しては沈黙を貫きなさい。主はあなたのそばにおられるが主はあなたにそれを与えようとしない。主は既にそれを与えておられるからで

ある。あなたはそれに気づくことはない。主は確信でなく感覚である。あなたは——こんな文の羅列ですよ」

紙の一番上から下までぎっしり詰まった聖書の引用。最後には『レオノフによる福音書二章十六節』と書かれていた。

「だいたいレオノフの福音書なんて聞いた事がないぞ。キリスト教の聖書ではないよな。ルイス、これはいったいどういう意味なんだ」ルイスは俺のほうを向いていった。

「そのとおり、これはキリスト教の聖書ではありません。ケフェウス教の聖書です」

ケフェウス教。

聞いたことはある。キリスト教の数ある一派で確か、神は人間個人の欲によって構成されるとかいう意味のわからない教義を掲げた、宗教というより秘密結社的な集団だった。

「ケフェウス教ならよく知っていますよ。確か教祖が脱税と不正蓄財の容疑で何回か逮捕されているはずですよ。私がまだ財務省にいた頃に何度か話を聞きました」

「それでなんでここにケフェウス教に引用文が書いてあるんだ？

スミス・ファミリーとケフェウス教に何の関係があると——」

「関係ありますよ」

そう言ったのはルイスだ。

「ケフェウス教は我々スミス・ファミリーが後ろに着いていないと社会的にとってもやっていけませんからね。我々のファミリーは彼らを保護しています」

ルイスは普通より長いタイプの葉巻を吸っていた。あの、煙が余計に出るタイプのだ。彼はそれを忙しそうに吸っている。

「私の昔いたところも宗教を保護していたね。中国には異常で特殊な宗教、とても多い」

リユーの半分片言の英語がどこかおかしかった。いつもはこんなではないのだ。どうやらルイスもどこかおかしいその話し方に気づいたようだった。

「えーつまり、スミス家はケフェウス教に政治的、警察的な保護を与えるわけだな。それでスミス家は何を得る？」

「金でしょうね。教祖が摘発されたときもその不正蓄財の額は莫大なものでしたからね。それからそのときは連中の帳簿も押収されたはずです。中身を見たことはありませんが多くの犯罪組織に金が渡っていたと聞いたことがあります」

金——。それは人を殺せ、それをもみ消すことのできるものだし、しかもそこには数字という名の無情な静物しか存在していない。

「ダン・ノートンの言ったこともあながち間違いではありません。」

しかし実際に金を受け取るのはおそらくファミリーというより教祖のもとに出入りする家の者でしょう。ファミリーが得るのはそれよりもっと強大で確固たるもの、つまり——」

「人心？」

「人質か？」

「情報網？」

俺やダンの憶測にルイスはただ首を振るだけだった。すると今まで黙っていて論議にも参加しなかったクレイブが突然口を開いた。

「信仰ですよ。連中が持つ唯一で絶対的な武器だ」

ルイスはにやつと笑って話を続けた。

「そうです。洗脳された信者たちの信仰という名の絶対忠誠心。スミス・ファミリーは彼らをよく犯罪に使います。といっても警察の捜査の攪乱のために殺されて捨てられるだけですがね。そういった人材は非常に貴重です」

ダンが軽くため息をついた。マフィアの命に対する姿勢はとても非情だ。そこには道徳心や思いやりというものは、ない。

空気がとても重いものになった。さらりと言ったのけたルイスさえあまりいい顔はしていない。誰だってマフィアの行う暗黒の部分は好きじゃない。

しかし、しかし、だ。これが俺の憧れた世界、俺の望んだビジネスだ。いまさら気持ち悪いなどといってられない。いずれは人を撃

つこともあるだろう。いずれは仲間さえ裏切らなければならぬときが来るだろう。いずれは、いずれは、と考えると碌なことは頭に浮かばない。

「スミス・ファミリーは、ケフェウス教を統括するのに二人の幹部を置いている。そのうちの一人がジャスティン・L・レオンです。レオンの洗礼名、それがレオノフです。つまりドンが下した命令はレオンから聞けということです」

この長い聖書の引用は警察の目を攪乱するものに過ぎなかったのだ。警察もさすがにケフェウス教の聖書までは目が届かないということなんだろう。

「しかし、なんで親父は、いやファミリーはそんな面倒なことをするんだ？ 会った時に直接レオンに聞け、と云えばいいじゃねえか」
「スミス・ファミリーは決して最強の犯罪組織ではありません。おそらく、情報の漏洩を恐れているんでしょう。仲間内とて、誰が聞いているかわかりませんからね」

俺は殺風景な部屋の様子をゆっくり眺めてみた。ここが俺の暗黒街での最初の足掛かりとなる。感慨と言うようなものは何もないが、妙なやる気が沸いてくる。俺は立ち上がって言った。

「それじゃあ、いってみるとしようぜ。ケフェウス教会へ、幹部のジャスティン・L・レオンに会いに行くんだ」

第四話 教会の男

「レオノフ様は事務室においでです。どうぞ、こちらへ」

声を響かせないように小さな声で話す神父は、とても不気味だ。

神父はフード付きの純白の服に身を包み、紫色のマフラーに近いような布で顔を覆っている。

ここはスミス・ファミリー管理下のケフェウス教会。

親父から渡された地図はメキシコの地図だった。もちろんそれを地理的に意味を読み取ることはできなかったが意味はルイスの解説によって分かった。それはメキシコの何処の地図であるかということなどを表しているのではなく、スミス・ファミリーが一部利権を持つ全米タコス協会のビルの地下にケフェウス教会があるということの意味していたのであった。全く複雑なところだがこれも全て警察その他の操作を攪乱するためだということだった。親父がルイスを仲間にさせたのもこういったことに対処するためだったのだ。

ケフェウス教会はビルの地下にあることもあつてとても薄暗かった。講堂から幹部レオンの事務所までは長く細い廊下を通っていた。そこは講堂とは違って松明が灯かりだなどということとはなかったがそれでもやはり薄暗い。俺はだいぶ前に見たナチスドイツの映画にあった地下基地を連想した。

ケフェウス教会へは五人で来たが入ったのは俺とルイスだけだ。ルイスによればこういう場所に多勢で来るのは幹部の連中が好まないだろうからということだった。

「ここが事務室です。レオノフ様は先程まで瞑目のお時間でしたのであまり阻喪などされませぬよう」

面白い建物だ。いや、当たり前のことだろうか。事務室までくる廊下はあちこちひび割れていたりしたのに、この事務室のドアは真新しく頑丈な金属で出来ている。よくは分らないがきっと頑丈な錠が仕掛けられているのだろう。

神父は懷から珍しい棒状の鍵を取り出してその錠に挿した。するとしばらく間を置いてドアが開かれた。

ドアの奥は広い部屋だった。しかしいわゆる事務所のような警察の詰め所のような雰囲気だった。部屋には椅子や机が多く並べられておりそこには十人ほどのガンマンが談笑していた。また壁には物々しく沢山のライフルが吊るされており、また酒瓶の詰まった戸棚もいくつが置かれていた。部屋の一番奥にはそれらしいでかい机が置かれていて、そこには部屋の中にいる奴の中でも特別体躯のいい大柄な男が座っていた。

「若旦那、こちらへ」

男はそう言うと言俺を部屋の奥へと促した。

「意外とお越しが早かったようで……、さすがはルイス。覚えておきましょう」

ルイスはにこりとませず席についた俺の後ろに立っていた。

「私がレオンです。他ファミリーとの対外関係を担当しています」

レオンは大柄な身体に、特注であろう黒のスーツ、そして趣味の悪い黄色のネクタイをしていた。

「若旦那に今回やっていただく仕事も同様のものです。最初に言うておきますがこれは簡単な仕事ではありません。また単純なものでもないといっておきましょう。実際これの成功するか否かはスミス・ファミリーの将来に多大な影響を及ぼすことでしょう」

レオンは神妙な面持ちになった。これがビジネスの顔というやつだろうか。あるいはこの男の素顔なのかもしれない。

「相手はリチャード・エルクラーノ。エルクラーノ・ファミリーのドンです。彼を消すこと、これが仕事です。もちろん最終的にはファミリーごと消えてもらうことになりますが、それはまた後の話です。まず、リチャード・エルクラーノに消えてもらいます」

俺は何も答えず軽くうなずいた。ファミリーの一員となつてから俺はこの社会の作法というものを少しずつ知ってきていた。

「エルクラーノ・ファミリー……。余り聞いたことがないが何処の

連中だ？」

「ジャリオ街です。彼らはそこで賭博による多大な収入を得ています。まあ、最近では麻薬や一番街などにも手を出しているようですが、たいしたことはありません。しかしジャリオ街での彼らの勢力は強大です。ジャリオ街はラスベガスのように華やかな所ではありませんが、一般庶民が利用するローカルな賭博場としては東海岸でも指折りの規模です。連中は三年ほど前ぐらいまではジャリオ街での収入で満足していたのですが、例の組織犯罪取締法でだいぶその活動に支障をきたしたようでしてね、最近われわれの領域を侵し始めたのです」

「しかしそんなことは日常茶飯事でしよう。なにもエルクラーノに限ったことじゃありませんよ」

スミスが横から訪ねるとレオンは困ったようにして言った。

「ああ、そのとおりだと私も思う。何しろ我々スミス・ファミリーはエルクラーノの連中と不可侵協定を結んでいるんだ。これを公開すれば圧力で自然と連中は大人しくなるはずなんだ」

「ではなぜ？」

レオンは答えなかった。これ以上は聞くな、というサインだ。

「話は大体わかった。で、俺達はどの程度自由に動けるのだい？お前の言ったとおりに動くのか、それとも自分達で計画を立てるのか？」

「手始めに連中の所有するカジノの一つを襲撃します。そこは大きくはありませんが、ジャリオ街の奴らの収入がすべて集まるところです。あとの人員など細かい話はまた今度にしましょう。その仕事の出来で今後のことは変わっていきます」

俺は軽くうなずきながら言った。

「なるほどね。お手並み拝見というわけだ」

俺は席を立った。

「話は以上のような。帰るぞ」

レオンも立ち上がって俺を見送った。

例の頑丈なドアの前まできてレオンは立ち止まった。

「そうそう忘れる所だった」

レオンは慌てながら机の方に戻ると銀のアタッシユケースを持って来て俺に手渡した。

「ドンからです。お渡しするようにと」

俺はその場で開けて中を見てみた。

中には護身用の拳銃が一丁、ホルスターと共に入っていた。

「他のファミリーが早くも若旦那の情報をつかんだという話を聞きました。若旦那も油断なされますな」

そういつてレオンが手渡したのは銃の携帯許可証だった。それには俺の顔写真が張ってあったが名前は別人のものだった。携帯許可証はレオンの好意によるものだった。俺は礼を言いつつケフェウス教会を後にした。

第五話 人間と謎

「リユーとか言うあの中国人。あれは氣をつけたほうが良さそうですね」

俺とルイスは二人でニューヨークヘルズキッチン地区の隠れ家にいた。もちろん俺はカジノ襲撃について計画を立てるためにルイスを呼んだのだが、ルイスは計画を立てるより先に、まず解決することがあると言い始めた。

「氣をつける、とはどういう意味だ。リユーが信用できないということか？」

「そうです。あの男かなり怪しいところがあります」

ルイスは相も変わらず葉巻を吸いまくっていた。ルイスが言うには吸う量は昔より減ったということだが、今でも人の二倍以上の量だ。

「あの男、確かチャイニーズ・マフィアから追い落とされた尺返しをするとか言っていましたっけ。ジョンソンもそんな寝言を本当に信用したんですか。ガキの喧嘩じゃあるまいし」

俺は黙っていた。皮肉じみたジョークで腹を立てるぐらいではこの社会はやっていけない。

しかし、リユーに変な節があるというのは俺も気づいていた。どこがどう、と言うわけではないがどこか不安なところがあるようだった。しかし、それは奴の調子のおかしい言葉のせいだとすましていた。

「どうだろう。リユーはまさかどこかと内通しているんだろうか」

「それならまだ可愛げがありますよ。その可能性はないとは言いませんが彼は誰かに利用されるなどというのをあまり好む性格ではないでしょう。またそれが我々の中で不自然に感じられる原因でもあるのですがね」

「じゃあなんだって言うんだ。まさか、奴がそのうち金目の物を持

つて姿をくりますなんてことじゃないだろうな」

「いえ、おそらくは麻薬です。それで奴はかなり儲けていると、私は見ますね」

ルイスは相変わらずさりと云つてのけた。

麻薬、麻薬か。なるほどね。そういえばこの前にリユーがチャイニーズ・マフィアを追いついだされたのもそれが理由だと聞いた気がする。

「しかも他の連中とは違い、投資だけではないようですね。様子からすると実際に販売に携っているようです。しかも奴はおそらくそれに少なからず手をつけているみたいですね」

どうやらルイスの話からするとリユーは相当な財力をかかえているようだ。それも危険な。

「うーん。だからといってどうしろというんだ。奴はまだ背信行為をした訳ではないし、第一俺達に敵意があるという証拠はないじゃないか。かえって奴に収入の何割かを納めさせれば、それが収入になるんじゃないか？」

「無理ですね。リユーがそれを隠している以上、奴がそれで我々に利益を食わせるつもりはないと考えるのが妥当です」

「ではどうする？ 手のつけようがないじゃないか」

ルイスは立ち上がって言った。

「まあ、しばらくは私にお任せください。一カ月後には何も問題ないようにして差し上げますよ」

ルイスは葉巻を床に投げ捨てると、足早にドアに方へ歩いていった。

「おいちよつと待て。カジノの襲撃の件はどうするつもりだ」

「さっきダンとクレイブを呼んでおきました。まもなく……いや、もう着いたようですよ」

俺は窓の外を見てみた。黒のキャデラックが停まって中から二人が出てきた。運転していたのは、分らないがどうやらファミリーの者のようだった。

「レオンも言っていました、あくまでジョンソン、あなたの仕事です。あなたとダン、クレイブとリユー四人でどうにかなさってください」

「んん？リユーは？」

「彼はできる限り計画段階では参加させないほうがよいでしょう。もちろん、全く知らせないわけにもいきませんがね。そこはダンの言葉を参考にするといいでしょう。彼はなかなか分っている男です」
ルイスはそういうとドアの向こうの階段をツカツカ下りて行ってしまった。

立ち代りにダンたちが入ってきた。二人とも漆黒のスーツに身を包んでいる。

「こんにちは、ジョンソンさん。ファミリーからの仕事の件は聞きましたよ。いやーしかし大変なことになってきましたね。わたくし昨日じゅうずっと国立図書館で情報収集に当たっていたのですけれども、いやーこれは大変ですよ。その前も知り合いの私立探偵とずつと話をしていたんですけれども……」

「わかったよ、ダン。取り合えず座れ。クレイブもだ」

二人は席に着いた。

俺は二人にリユーが少し怪しいことについて述べ、二人は俺にここ数日で収集したというエルクラーノ・ファミリーの情報について長々と述べた。

二人の話の中には主立って目新しいことはなかったが、興味を引いたのはそのカジノの現在の営業状態についてだった。ダンたちは実際にジャリオ街に行つてエルクラーノ・ファミリーのカジノに行つてきたというのだった。ジャリオ街はローカル・カジノとして最大級であるのにも関わらず、最近では多くのカジノが廃業に追い込まれているというのだった。

「そりゃあ、まだ営業してるカジノつてのもひどいものでしたよ。ほとんどの客が日雇い労働者でほとんど金なんか持っていない奴らなんです。中には街の悪ガキどもなんかもいたりしてね」

「治安もかなり悪かったですよ。先日行った時だけでも三回も銃声を聞きましたからね」

「そうか……。エルクラーノ・ファミリーも組織犯罪取締法でだいぶ圧迫されていると聞いたしな。カジノに多額の金を要求しているんだろうな。そんなにボロいカジノだというなら、襲撃は意外と楽かもしれないぞ」

それに対してクレイブは神妙な面持ちを見せた。

「それがですね。なかなかそうもいかないようなんです。どんなにぼろくてゴミだめのようなカジノにもちゃんとエルクラーノ・ファミリーの連中が数人詰めているんですよ。汚い労働者しかいない中でそいつらだけスーツを着ていたのですぐ分りましたよ」

どうやらエルクラーノの奴ら、構成員だけは数をそろえているらしい。金は余り持っていないかと思っていたが人を雇うぐらいは出来たんだろうか。

「人数のことは気にすることありませんよ、ジョンソンさん。いくら連中がエルクラーノに雇われているとはいえ、連中だつて金はそんなにもらっていないはずですよ。味方につけることは難しくありませんよ」

ダンはそう言ったが俺にはいまいちしくりこなかった。だいたいの金を持っていない連中の所には最初からやとわれには行かないと思うのだ。俺には別な理由があるように思われた。

「しかももう一つ問題があります」

今日のクレイグは多弁だ。やはり仕事はきつちりこなす奴なのだろう。

「ジャリオ街を管轄する警察の長が交代になるのです。今の署長はジュネーというエルクラーノに飼いならされた取るに足らない老人なのですが、来月には新顔の若い男が署長の地位につきます」

「まさか元FBIだと言っんじゃないんだろうな」

クレイグは笑いながら答えた。

「いえ、それほどではありません。ペンタゴンでホワイトハウスの警備についていた男です」

「そうか、まださすがにペンタゴンにまでは闇社会は進出してないからな。」

「まずいかもしれない」

今のところ課題は二つ。実行メンバーを若干補強すること、そして早期に実行に移すということだ。あとそれに続けているいろいろ物資も集めなくてはいけない。車や銃などが要るだろう。その他にも逃走経路を決めたり事件後の処置などもある。

俺はそういった煩雑なことを全てダンに一任することにした。ダンは勢いよく返事をした。

「しかしながらですね、ジョンソンさん、車や銃はファミリーに協力してもらうのが一番です。それについてはジョンソンさんが直接ファミリーに行って頼んできてください」

ダンはそう言って部屋を飛び出していった。停めてあった車にも乗らず、ダッシュで官庁街の方へ走り去っていく姿はなんとも頼もしい。

残った俺とクレイブは車でオフィスへと向かうことにした。ダンとクレイブが乗ってきたときに運転していたはずの男はもういなかった。

「奴はファミリーの男です。外回りに行くと言っていました」

運転しながらクレイブが言った。

「外回り？ 何だよそれ」

「治安維持です。私たちの隠れ家があるあの辺りはまだまだスミス・ファミリーの支配が徹底されているとは言えない所ですね」

だから何をするのだ、とは聞かないでおいた。俺だつて、街の片隅に死んでいるとも眠っているとも分らない倒れた人を見かけることは何回かあった。おそらくクレイブが言っているのはそういったことなのだろう。

そういえば、クレイブはルイス同様ファミリーから紹介された人間だった。元FBIで、闇社会に深入りしすぎて辞めさせられたと言っていた。今考えてみるとどうもおかしい。一般的に考えて、FBIは非常に国粹的で全くマフィアの言うことに耳を貸さないアンタッチャブルな連中だ。FBIの仕事は闇社会の連中を見下し軽蔑することから始まる、とファミリーの誰かが言っていたのを聞いたことがある。そんな奴がマフィアに転身するだろうか。いやする訳がない。では何故クレイブは……。

リユーにしるダンにしる、仲間との謎は深まるばかりだった。しかし、いくら考えても、そんなことの謎に答えが出るはずもない。沈黙が過去の啓示。それがこの社会の絶対の方程式なのだ。

第五話 人間と謎（後書き）

不思議なタイトルでしたが・・・どうですか？次回にご期待ください

第六話 殺人会社

闇社会――。

世間で言われてるほど恐ろしくはないが、昨日会った人が今日死んでいるような世の中だ。小さい頃教え込まれてきた多くの常識が、単なる奇麗事に過ぎなかったのだと気づかされてしまう。

目の前にいる白髭の老人はファミリーのドンであり俺の親父だが、こうして向き合ってみるとやはりこの闇社会で培ったであろう独特の雰囲気にある種の恐怖を覚えてしまうのだ。

「つまりお前は私に武器と車両の提供を要求しているのだな？」

「提供の要求というか、必要なんだ。その、つまり仕事に」

幹部と話をするだけで済むはずだった”道具”のお願いも秘書の余計な計らいによってわざわざ親父と話すことになってしまっていた。

「武器はともかく車両は無理だ。お前だって見てきたろう、庭を」
「庭？」

「駐車場のことですよ。今は工事中なんです」

親父のそばに控えた顧問が口を挟んで言った。

「全ての車両は別所に移してあります。つまりジョンソンに渡せる車両はないということですよ」

俺は首をすくめて見せた。

「まいったな。車両なしには仕事はできないぜ？ でもまあ仕方ない、せめて俺達がここまで乗ってきたセダンはもらっておくよ」

親父は軽くうなずいて了承した。

俺は武器も要ると言ったがこれも返事はノーだった。

「今月はニューヨーク市警の密輸防止キャンペーン月間でしてね。

まとまった量の銃器は郊外に移してあります」

「いやしかし、ここに全くないって事はないだろ」

「もちろん一定量常に貯蓄されていますがすべて”親衛隊”が使う

ものでしてね。お渡しできませんよ」

顧問の冷静な物言いが気に障る。彼はファミリーに専属で雇われた、確か会計士だ。雰囲気にもそれらしさを垣間見せる。実は俺の一番嫌いなタイプだ。

俺は一晩中鏡と練習した、”冷やかな不満の表情”というのをやって見せた。

「というわけでこちら側からは何のフォローも出来ない。私たちも多忙でな、時期が悪かったのかもしれないよ」

親父の口からそんなことを聞くのは意外だったのかもしれない。

俺は助けを求めるように顧問を一瞥した。

「そう言えば……、ポルトマンがこのあいだの恩を返したいと言っていました、あそこの会社を利用しては？」

親父は顎に手を当てて軽く頷いた。

「ポルトマンか。悪くないかもしれん。ジョンソン、お前はまた奴を知らなかったな？」

「ああ。名前も聞いたことがない」

「いい機会だ。マーカス、奴に紹介してやってくれ。」

「わかりました。今奴を来させましょう」

親父にマーカスと呼ばれた顧問は立ち上がって足早に部屋を出て行った。

「ポルトマンというのは何者なんだ？ なにかの会社の経営者か？」

「そうだ。奴はMMMの社長をしている」

「MMM？」

「Mac's Murder Makersだ。巷じゃ殺人会社とか呼ばれているな。ポルトマンはその社長だが、マックレガーという奴が先代社長だった。今はキューバの刑務所にいるがね」

「キューバの？」

「そうだ」

「なぜ？」

親父は答えなかった。何か別な事情があるのだろう。

しかしまあ、キューバの刑務所ときたら理由は大体決まっている。キューバとの密輸事業においてカストロ議長に十分な金を払わなかったせいで捕まる連中というのは多勢いる。特にキューバ危機からは特に国防総省がFBIをけしたてて警戒に当たらせている。

親父の顧問が再び部屋に入ってきた。MMMの社長ことポルトマンはすぐにこのオフィスに来るとのことだった。

「わかったな。しつかりやれ」

それだけ言い残すと親父はさっさと奥のプライベートルームに入ってしまった。 ”書斎” の別名で呼ばれるその部屋は親父が誰にも侵入を許していないという特別な部屋だ。

親父抜きということで若干不安でもあったが、俺はポルトマンを迎えるべく顧問に連れられて別室に移った。

オフィスの奥の奥にあるこの部屋はその手の人と話をする時専用ののだという。広いオフィスの中を歩かせて
するのが目
的なのだろう。

部屋には俺と先の親父の顧問マークス、そして俺の知らない眼帯の男だ。マークスの話によると彼はオーロップ・バリスという名の男で、ファミリーのナンバーツーなのだという。

さしずめ、マークスでは顔不足だということなのだろう。ニューヨーク市リトルイタリー地区を最初に制圧した武闘派であるというバリスは片目でじっと俺の方を睨みつけていた。

やがてドアの向こうから足音が聞こえてきた。ポルトマンが来たのだろう。

「会っ前に言っておきます。彼はこの社会の人間というより純粋なビジネスマンです。いつものやり方が通用する相手ではないことを常に意識してください」

マークスの言は意外だった。相手は殺人会社の社長なのだ。この

社会の人間でなくて何なのだろう。俺は商店街で人殺しを商売とする店など見たことがない。

ドアが開かれた。

入ってきたのは、なるほど、この社会の人間ではない。しかし割と若い男だった。四十ぐらいだろう。

「マーカス様。先日はお助けいただきまして、誠にありがとうございます。ありがとうございました。ファミリーのお力がなければどうなっていたことが。感謝、感謝でございます。」

ゆっくりと独特の口調で話す様はこの社会でないことを確かに示していた。何処がというわけではない。何となくだ。

「ああ、お金の件は心配ない。回収済みです」

「了解しました。今回はそのお礼ということで、しっかり勤めさせていただきます。バリス様もご同席ですしね」

ポルトマンは軽くバリスに会釈しながら言った。

マーカスが席に座るよう促した。机には茶色の封筒が置かれていた。ポルトマンは黙って封を開けた。

俺は少し不機嫌だった。マーカスとバリスには例があつたが俺にはなかった。俺だつてドンの子子なのだ。

「エルクラーノと一戦交えることになりました。武器、車両、それから人員を少し」

ポルトマンは目を上げて言った。

「そうですね。エルクラーノ・ファミリーと……。あそこその地域に関して幾つか情報を持っていますがいかがですか？ 今なら、例のこともありますし、お安くしますが」

「ジャリオ街の警察署長が交代する件？」

「いえ、もっと新しい話です」

マーカスはバリスの方を見たが、バリスは何も言わなかった。

「スミス・ファミリー様には重要なお話だと思いますがねえ」

マーカスは黙ってうなずいた。

「買いましょう」

ポルトマンは胸ポケットから伝票を取り出した。

「お支払いは？」

「キャッシュ。いや付けといてくれ」

「徒にはならんか」

ここで初めてバリスが口を開いた。とても低くて、聞き取りづらい声だった。

「無料にですか。無理ですね。それだけ価値のある情報だとしてご理解下さい」

バリスは何も言わなかった。ただ、その片目でポルトマンを睨みつけただけだった。

ポルトマンは無視して話を続けた。

「責任者はマーカス様で宜しいですか？」

「いや、こちらジョンソン・スミスだ。初仕事になる」

「ドンのご子息で？」

「そうだが……話にあっただろう」

ポルトマンは黙ってうなずいただけだった。

「ではジョンソン様、例の警察署長の件はご存知ですね？ なるべく時期が早い方がいいということですよ。細かい話し合いは……そうですね、明日などはいかがですか？」

俺は快諾した。早い方がいいということはダンからも聞かされていた事だった。

マーカスがポルトマンが差し出した契約書にサインして話は終わった。ポルトマンはバリスに連れられて部屋を出て行った。

「彼がポルトマンという男ですよ。MMMこと殺人会社の社長のね。いかがでした？ 悪い男ではないでしたでしょう？ あの手の男は商売の相手してはやりやすいほうですよ」

部屋に残った俺とマーカスは話を続けた。

「そうだな。さっき、彼は純粹なビジネスマンだという言い方をしたが何のことだか分った気がしたよ」

マーカスは笑いながら答えた。

「そもそもMMMは時代の古い組織なんです。南北戦争のときにも北軍指揮下で暗躍した連中ですからね。組織自体も巨大ですしねアメリカを本拠地としてヨーロッパ、アジアなんかに子組織があります。フランスじゃ外人部隊の兵士のほとんどがMMMです。ジャパンなんかでも金大中事件の決行メンバーはMMMの連中です。そうやって国家レベルで信用されてるんです。そういう意味でこの社会の人間ではないとの言い方をしたのですよ」

笑って答えたマーカスだったがそこには幾つもの皮肉を含んでいた。或いは自虐とも取れるその響きは俺のいるこの社会の本質を意味していたのかもしれない。この社会はその意味で言えばとても孤独なのかもしれない。恐ろしいといえばそうだ。ただ、その言葉だけで語れない何かがあると、俺には思えてならないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5653b/>

暗黒街の沈黙

2010年10月9日11時16分発行